

### 知性の悲観主義、意志の楽観主義

戦前、イタリア共産党の創始者の一人で、反ファシズムの闘いを率いたアントニオ・グラムシは「知性の悲観主義、意志の楽観主義」という言葉を好んで使いました。

どんなに絶望的な状況に直面しても知的な誠実さをもって社会の現実を見つめ続ける、それでも、いやそれゆえ人間は絶望を突き破って未来への一途の希望をもつことができる、という意味です。グラムシはムッソリーニ政権によって投獄されます。身体に障害があり、虚弱であった彼にとつて獄中生活はより苛酷でしたが、いのちだけではなく知的・精神的な退化から自らを守るために読書と執筆を続けました。そして獄中からこの言葉を繰り返して発すること、絶望することなくファシズムと闘い続ける人びとを励まし、自分を奮い立たせたのです。

1974年、全障研委員長であった田中昌人は、『みんなのねがい』の連載「講座・発達保障の道を力強くすすもう」(1970年2月号から1973年5月号まで)をもとに『発達保障への道』(3分冊)を刊行します。この本では1960年代後半から70年代前半にかけての、障害のある人びとへの差別や権利侵害の実態を掘り起こし、それらを生み出す社会や政治のしくみを「発達侵害の道」として徹底的に批判していきます。そして「発達侵害の道」を批判し尽くしていく先に、障害のある人びとの発達と権利を保障する実践や運動が生まれていることを明らかにし、「発達保障への道」に続く足場が「いま、ここ」に築かれていることを確かめていきます。厳しい現実を見つめながら、希望や可能性を語ることをあきらめないこの本を読み返すたびに、グラムシの言葉を思い起こします。

# 発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【最終回】  
発達保障の道をみんなで歩く



金沢大学  
河合隆平

かわい りゅうへい  
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著書に『発達保障ってなに?』共著(全障研出版部)など。

### 歴史の可能性と生きようとする意志

日本近代思想史研究者の鹿野政直かの まさなおさんは、「人びとの心奥に、秩序への違和感ひいては変革への志がもやされつづけるかぎり、歴史はたえず転機となる可能性を内包している。…人びとだれもが、みずからの可能性をさぐる権利をもつように、歴史の可能性をさぐるのは、人びとの生きようとする意志の権利である」といいます。歴史は、現在から過去を問うことによって現在を見つめ、未来を見通すものですが、その時々によってどうであったか、だけではなく、いかなる可能性があったのかを問うこともできます。もっといえば、その可能性がいかに押しとどめられ、切り捨てられてきたのかをも問うことによつて「人びとの生きようとする意志」に触れることができるのではないのでしょうか。

1965年4月、13歳の吉田厚信は脳性マヒと診断を受けて、滋賀県にある重症児施設「びわこ学園」に入所しました。彼の姿は、映画『夜明け前の子どもたち』の最後に登場する第二びわこ学園東病棟ハトAグループの子どもたちのなかに見ることができます。厚信も例外なく、就学免除の手続きをして学園に入所しています。映画には出てきませんが、彼は言語障害と闘いながら、しほり出すように「学校へいきたい」と語りました。

ぼくは、学校へいきたいのだけれど、ここではその夢はかなえられそうにもありません。ぼくはずっとがまんしてきたけれど、これ以上もうがまんできません。このさい、ぼくの考えている最終手段は、兄さんと相談のうえ、ここをでていって、オムツをしても、兄さんの車で学校に送り迎えをもらうか、ここで一生くらすかどっちか一つの道を選ぶ結果になりました。だから兄さんと相談のうえ、オムツをしても、学校へ行く

つもりです。たとえ学校で息苦しくなっても、それは、ぼくが望んでいったのですからしかたがありません。

学校へのねがいを燃やし続け、亡くなった友だちの分まで生き抜くのだと決意していた厚信のねがいは、実現することはありませんでした。1969年1月、意識不明の状態が4ヵ月ほど続いた末、16歳で彼の人生は終わりました。当時、全国にはたくさんの「厚信」がいたのです。障害のある子どもたちのいのちをかけたねがいは、その時々で切り捨てられながらも、途切れることなく無数の結び目をつくることで「学校へ行きたい」とのねがいを可能性から現実のものへと転化してきました。

### こんな思いをなぜせんらんだろう

これを苦難を乗り越えてねがいが花開いていく歴史として理解することは、一人ひとりの苦しみやねがいを大きな成功物語のなかに押し込めてしまいかねません。

1974年3月、京都府の口丹地域で「口丹養護学校設置促進研究会」が開かれました。この時、寄宿舎を利用して与謝の海養護学校高等部に入学した脳性マヒのある女子生徒の母親は、「たとえ家から通学できないとしても、せめて週一回は無理をしなくても家へも帰れるくらいの所に学校がほしい」と訴えました。入学の際に寄宿舎の入舎に備えて「持ち物には全部名前をつけてほしい」といわれたので、母親は「肌着類、パンツから上に着るよそ行きの洋服にまで布をつけて、ひながら名前を書きました」。

自分で読むためにつけるのではなくて、人に読んで「これはあなたので」と言ってもらうためにつける名前を一つ一つつけながら、字も読めないのに、何の